法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-27

<文献紹介>G・ラッポ，A・チキシェフ，A・ベッケル共著　渡辺一夫訳『モスクワ都市の地理』

平田，洋

(出版者 / Publisher)
法政大学地理学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理
(巻 / Volume)
17
(開始ページ / Start Page)
51
(終了ページ / End Page)
52
(発行年 / Year)
1989-03-31

文献紹介

G・ラッポ，A・チキシェフ，A・ベッケル共著　渡辺一夫訳

『モスクワ都市の地理』

(原本名　MOSCOW CAPITAL OF THE SOVIET UNION
—A short Geographical Survey—1976)

古今書院　1988年

本書は，1976年8月，モスクワで開催された第23回国際地理学会議（IGC）参加者に配布された資料文献のひとつである（訳者によれば，英語版と仏語版の2種類のみであったとのこと）。著者たちが語るように，IGCに向けて用意した資料である。よって，対外的関心を意識した編集であることが伺われる。

訳者の紹介によれば，G・ラッポは都市地理学を専門とし，ソ連科学アカデミア地理学部経済地理学主任である。A・チキシェフは自然地理学を専門とし，現在，モスクワ自然研究者協会会長である。A・ベッケルはモスクワ建築大学卒業後，モスクワの都心建設及びモスクワの都市計画に参加してきた専門家である。

目　次　（大項目のみ掲載する）

序　章
第1章　歴史の流れに沿って
　　—十月革命までのモスクワ—
第2章　モスクワの自然環境
第3章　モスクワの経済地理
第4章　首都の機能
第5章　モスクワの人口
第6章　モスクワのレイアウト
第7章　モスクワをとりまく隣接地帯
第8章　21世紀への展望

序章で，著者たちはモスクワを次のような都市であると位置づける。

モスクワは世界最初の社会主義国の首都である（1918年，ソ連が社会主義国として誕生した際，205年振りにサンクト＝ペテルブルグからモスクワに移されたことによる）。この古くて新しい首都モスクワは，この国最大の工業及び知的生産部門の集積地であり，政治，経済，科学，文化，情報交換などの国内的及び国際的中心であるとする。

次いで，社会主義国での都市づくりの原則を述べる。

1，いかなる都市でも，社会主義にあっては，その国の国家経済計画と都市計画（隣接都市を含む市民の生活と労働に対して，好ましい居住環境をつくること）に沿って発展し建設される。よって，資本主義国でみられる都市問題（弊害）は生じないと強調する。

2，将来，共産主義社会に移行しても，この社会体制にふさわしい首都になる。そのため，モスクワは今，社会主義の巨大な実験室となっていると述べる。

第1章では，特色ある歴代順に，モスクワがどのようにして膨張していったかの経緯を述べる。

モスクワは当初から首都にふさわしい好位置に立地していたとする（「経済的＝地理的優位」と表現する。13世紀モスクワ公国，14世紀モスクワ大公国，15世紀後半ロシア帝国の各首都である）。

交通の要所に位置したため，交易上の要地ともなり，商業，手工業の発達は早くから見られた。しかも，それは外敵を防禦しながらの成長であった。この軌跡は，拡張していった城壁と土塁と外濠及び砦に囲まれた景観で理解できる（囲郭都市といわれる）。

モスクワ堅守のために，商人や職人の集落は，兵士たちの居住地にとって替えられ，周辺部へと移住されられた（よって，後に，この外周部に工場群が発達することになる）。

一時期（1713年〜1918年），首都はモスクワよりサンクト＝ペテルブルグに遷都された。その際，利害を共にする貴族や豪商たちも転出した。しかも，1812年には，ナポレオンの侵攻を受けて大きな戦災に遭う。しかし，ロシアの心臓部としての重要性は失なわれず，以前にもまして商工業都市として成長したと述べる。読む者にとって驚異すら感ずる。首都の座を譲りながらもペテルブルグ以上に成長した理由として，経済的＝地理的優位性をあげる。

ロシアの産業革命時代（1830〜50年代）のモスクワ

は，地理的優位にひかれて，繊維工業を主とする工場制手工業の進出がみられ，後に，鉄道網の発達に伴いモスクワは大工業都市に成長する。その結果，ここに働き，居住する労働者たちは，革命的兵士と共に10月革命を勝利に導く原動力となる。このことから，ソビエト権力を樹立したモスクワが革命的労働運動の中心地であったと述べる。

第2章では，都市づくりのために生ずる自然環境の破壊を最少限に喰い止める努力が述べられる。

社会主義国での都市計画は，地形，地質，地下水，岩石の種類にいたるまで詳細に調査し，美的価値を含めた都市形態をデザインする。そのための調査とは，次の通りである。

都市化と工業化に伴うコンクリート化や大気汚染及び水質汚濁に原因する植生，鳥類，水棲生物などの自然界の変化や日射量の損失にいたるまで，自然環境の実態を調査する。最後に，バイオシノーセス（生物共同体・生物群）をつくり出すことの重要性を説く。

第3章では，ソ連のどのいかなる都市よりも，モスクワのもつ経済的＝地理的優位性の具体的内容を交通機関の発達と絡ませて述べる。

モスクワは，1）海上輸送を除くすべての輸送手段の結節点であること。2）最も発達した集中・放射状の交通体系をもっていること。3）道路，鉄道ともに殆ど直線状であること。4）近代的輸送機関と輸送網によって，モスクワはエネルギー資源と地下資源の賦存地点に近づくことができたこと。5）主要都市との経済的距離も短縮できたこと。このことによって，6）大消費地であると共に，各種の工業を発展させることができたこと。さらに，この章の総括的記述として，モスクワと周辺都市との関係を，次のようにまとめる。

1）微視的見方では，モスクワは周辺都市（ソ連の大都市の半分はモスクワを中心とする半径1,000 ㎞の円内に位置）の結節点としての役割を果している。周辺都市はモスクワと歩調を合わせて発展する。

2）巨視的見方では，二大経済ベルトの交点にモスクワは位置している。一つは東西ベルト（西はブレストから東はウラジオストックまで）。二つの南北ベルト（北はコラ半島から南はコーカサス地方まで）である。いずれも，交通体系を通したモスクワの位置的優位性を説いこいる。

第4章では，モスクワはこの国最大の頭脳産業の中心地であり，また，軽工業から重工業にいたるすべての産業が発達している最大の工業都市でもあり，科学，教育，文化など各部門の集積地であると述べ，加えて，単なる政治，イデオロギーの放射状的発信拠点でなく，アカデミックな都市であることを強調している。

第5章では，モスクワに流出入する周辺都市の人口の分布状況をまとめあげ，そこから，将来の適正な人口配置を追求しようと試みている。

第6章では，交通網，道路網からみたモスクワとモスクワを三つの地帯（都心，中間，周辺）に区分し，地帯別に文化，教育，生産，流通機関の各代表的建造物，施設の分布状況と歴史的由来を紹介している。共に，周辺部での「職住接近」＝「産業地区と住宅地区の組み合わせ」問題が解決されつつあると述べる。前章の人口分布を重ねて考察するとモスクワの重厚さが理解できる。また，視覚に訴える材料を用いながらモスクワを非常に詳細に描写し，読む者を知らずのうちに，モスクワに誘われてしまう内容に満ちている。

第7章では，首都モスクワと深くかかわりを持つ隣接ないし周辺都市との相互関係を把える（モスクワ州全域に及ぶ記述である）。端的に云えば，首都モスクワの影響は非常に強いものであり，その影響を受けながら隣接ないし周辺部は発展し，現在に至っている。しかも，多様な機能を持った都市として成長していると述べる。また，隣接都市を衛星都市地帯とその外周地帯（モスクワ＝メガロポリスが過密化しないように調整する役割を持つ）とに分けて，各々の役割を述べる第15図は読ませる地帯区分図である。

第8章では，将来，予想されるモスクワ像が語られる。共産主義国家にふさわしい首都モスクワづくりのプランが示されている。美的感覚を失なわず，市民の健康保持と快適な生活が約束される都市づくりを目指している。人口及び産業，教育，文化，公共サービスに至るまでの適正配置を目指すプランが示されている。

以上であるが，首都モスクワを，単に囲郭都市と呼ぶ歴史的産物としてのみ把えるのでなく，現在，将来共に，ソ連の首都はモスクワでなくてはならない理由を厚く裏付けた都市の地理である。

モスクワを多面的に要約的に紹介し，社会主義国での都市づくりの緻密さを語りかけてくれた本書であったが，それだけに，具体的材料で裏付けられた表現が欲しい箇所もあった。また，モスクワが抱える都市問題の有無も知りたいところである。機会あれば，本書を携えて，1976年以降のモスクワの変容を見聞したい気持にかられる内容である。

訳者は本地理学会会長である。　　（平田　洋）